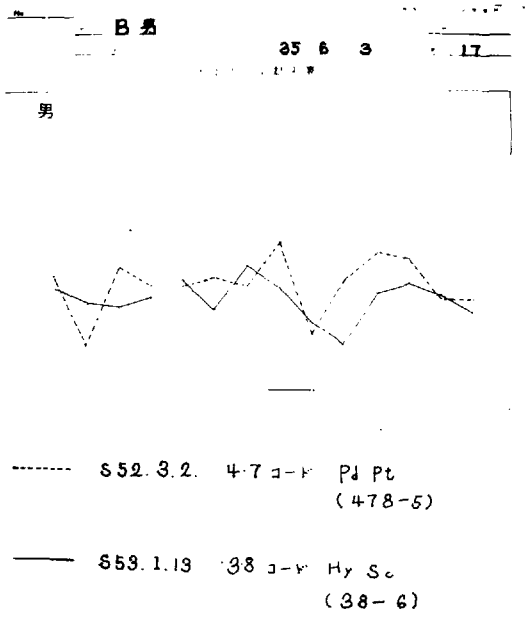

（表V）

34、筋ジス病棟における生活指導に関する研究
― 作業指導における一考察 ―

国立療養所八雲病院
指導員　大友政明　桜田　裕
藤島慎一
保母　木村美知子　出町友子
遠藤美恵子

昭和52年４月より、作業室が設置されたのを機会に、第１に病棟間交流を図り仲間意識を高める。第２に自主的活動とし自発性、協調性を養う。第３に七宝焼を行い自己表現力をつける。などを目的とし手芸活動を統一し実施してきたので報告する。

対象、中学卒業者の希望参加としたため、病型、年齢、ＩＱ、障害程度、活動経験の深さなど様々な男子16名、女子５名、計21名であり、主な病型はデュシャンヌ型を中心に、ウェルドニッ

ヒホフマン氏病及び小脳性失調症などである。

〔実施までの経過〕

組織作りは、患者S（病名、ウェルドニッヒホフマン氏病、男子、23才）など過去に自主活動経験のある者が中心となり行い、活動内容は七宝焼とペーパーフラワーとした。又運営についても自主活動という点を重視し、技術指導についても自主研究によるとした。

〔実施状況〕

参加者を援助がスムーズに行えるよう5つのグループに分け、患者の中から研究員、指導者を出し全体と各グループの指導を行うとした。製作過程については、①デザインノートにデザインする。②銅板にデザインを写す。③銅板を切り、たたき出す。④デザインに従い絵の具をかけ、⑤焼き上げる。これらの過程のうち③など力を要する作業については職員が援助したが、できる限り独力による製作とした。その結果、当初独自のアイディアを必要とする作業に不慣れなため作品のイメージ作りなどで苦労していた患者達も、イメージ通りできるだろうかといった楽しみを覚え、又実際に焼いてみることで興味、意欲を持つようになってきた。このことは、ペーパーフラワーとの比較でも、当初両者同程度の興味であったものが、最近では七宝焼に興味のウエイトが移ってきている点でも明らかである。これは両者の製作過程の違いによるものと思われる。つまり、ペーパーフラワーでは自己表現という点については、工夫によるでき映えの違いはあるが、全般的にはテキストに従って製作する過程であり、それに対し七宝焼では技術的工夫のほかに、独自の作品が作れるという点があり、この違いによる差であると考える。この点については昭和52年11月のアンケートでも裏づける結果が得られた。このように自己表現力の訓練という点について七宝焼の効果は一応認められるところである。しかし活動への参加姿勢では、一部の者を除いて積極的姿勢に欠け、その効果が参加姿勢に生かされるまでには至っておらず、むしろ積極的参加者とそれ以外の者との意識のギャップが広がる傾向も見られ、それに対し個別指導は行っているが、あまり効果は表われていない。この原因としては曖昧な気持で参加した者が多かったこと、更に参加者の能力の差などが考えられる。

〔ま　と　め〕

以上のことから、第1、第2の目的については、意識の急激な変化は認められず、これまで目的は達成されるに至っておらず、今後の方向としては、やはりある程度能力別のグループ化が必要であり、又病棟での日常生活においても、今まで以上に自律的生活を促す指導が必要と思われる。次に第3の目的については、その効果が行動面に影響を与えるまでには至っていないが、普段あまり自発的行動の見られない患者達に対し、作業面から自発性を促すための一方法として一応の効果はあったと考える。又今後、器具類の工夫により更に効果は期待できると考える。

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

昭和52年4月より、作業室が設置されたのを機会に、第1に病棟間交流を図り仲間意識を高める。第2に自主的活動とし自発性、協調性を養う。第3に七宝焼を行い自己表現力をつける。などを目的とし手芸活動を統一し実施してきたので報告する。

対象、中学卒業者の希望参加としたため、病型、年齢、IQ、障害程度、活動経験の深さなど様々な男子16名、女子5名、計21名であり、主な病型はデュシャンヌ型を中心に、ウェルドニッヒホフマン氏病及び小脳性失調症などである。